郷土かるたで2001年

いよいよ2001年。「ゆとりと活力のあるまち」に向けて前進を続ける海老名市は、古くは相模の国の中心地として栄え、数多くの文化財や旧跡を持つまちでもあります。「海老名郷土かるた」は、市内の文化的遺産をわかりやすく紹介したもので、昭和52年作成以来、みなさんに親しまれています。
今回は、この中からいくつかをご紹介します。お正月のひととき、ふるさとの昔を振り返ってみませんか。

せ　千手観音(せんじゅかんのん) 仁王(におう)が守る 清水寺(しみずでら)

天平のむかしから 人々の信仰を集める

千手観音立像（龍峰寺・国分北）

千手観音像は、740年（天平12年）、天皇の勅(みことのり)を受けてつくられました。
この観音像は、高さおよそ5㍍、カヤ材の一木造りで、衣の彫り方などから平安時代に造られたものであるといわれています。後の時代に流行した、目の部分を別に入れる「玉眼嵌入（ぎょくがんかんにゅう）」という技法が用いられていることから、鎌倉時代末期に補修されたか、古い本尊にならって再興されたものであると考えられています。
この像が収められている観音堂は、元は清水寺のものでしたが、明治初(はじ)期に起こった仏教の排斥運動（廃仏毀釈(きしゃく)）により、寺の名前が廃されて観音堂だけが残りました。現在は龍峰寺が管理しています。

て　天平(てんぴょう)の 礎石(そせき)が語(かた)る 国分寺(こくぶんじ)

法隆寺式の荘厳なつくり 相模国のシンボル

相模国分寺跡（国分南）

相模国分寺は、国分僧寺ともいわれています。聖武天皇の詔(みことのり)を受けて、741年（天平13年）に相模の国の中央に建立されました。国分寺の伽藍(がらん)（寺の建物）は、金堂と塔が東西に並び、その北側に講堂が配置される法隆寺式で、講堂の北には僧坊、北方建物が配置されています。
規模は、国分寺の中でも全国最大級で、七重塔は高さ65㍍であったと推定されています。文献によれば、819年（弘仁10年）に2回炎上し、878年（元慶2年）にも地震にあい、炎上しました。最近の発掘調査で、焼失後に再建されていることが確認されました。
現在、塔跡と中門跡、それに続く回廊跡は復元されていて、現在もこの遺跡を保存しながら活用する環境整備事業が進められています。

け　県央(けんおう)に さすが海老名(えびな)の 大欅(おおけやき)

ふるさとの歴史を 見守り続けて560年

海老名の大ケヤキ（国分南）

「海老名の大ケヤキ」は、幹の周囲はおよそ8㍍、高さは16㍍。樹齢はおよそ560年といわれています。古来、郷土の名木として知られ、今なお枝を張り茂っています。
ケヤキは、広く関東地方に自生して、昔から人々に親しまれ、庭木などとして植えられてきました。「海老名の大ケヤキ」の由来は、相模湾が深く内陸に入り込み、海老名が入り江になっていたころに、一人の漁師がここに住み、舟をつなぐために打ったケヤキのくいが根付いて枝を張り、大木になった、という伝説に基づいています。この木は、別名「さかさゲヤキ」とも呼ばれています。

き　郷土史(きょうどし)の 道(みち)をひらいた 中山翁(なかやまおう)

相模国分寺の重要性を 初めて世に紹介

中山毎吉(つねきち)氏

相模国分寺礎石に腰かける中山毎吉氏（右）［中山春樹氏提供］

中山毎吉氏は、海老名の小学校教育に力を尽くすかたわら、郷土史の調査・研究を行いました。相模国分寺研究については、その遺跡の重要性を初めて世に紹介して、保存整備の必要性を強く訴えました。
彼の努力と熱意が次第に人々を動かし、1921年（大正10年）3月、相模国分寺跡は、県内で最初の国指定史跡になりました。その3年後には、矢後駒吉氏との共著で「相模国分寺志」を出版。これは、これまでの研究成果の集大成で、現在に至るまで不朽の名著として知られています。さらに、収集した国分寺の瓦(かわら)などの遺物を収納・展示するために、海老名小学校校庭に建物を造って「温故館」と名付けました。この館名が、現在の郷土資料館に受け継がれています。

と　土器(どき)・石器(せっき) 瓦(かわら)や板碑(いたび) 温故館(おんこかん)

大正期時代の先端をいく 郡役所の建築様式

郷土資料館 温故館（国分南）

現在の温故館は、大正7年に海老名村役場庁舎として建てられました。当時は、官庁として象徴的な存在だった郡役所の建築様式を取り入れた、時代の先端をいく建物でした。これを修復・補修したのち、昭和57年10月1日に郷土資料館として開館しました。
1階には、相模国分寺跡からの瓦(かわら)をはじめ、市内各地で出土した石器・土器などを展示。2階には、明治時代ごろから市内で使われていた生活用具、農耕具などを展示しています。
館名は、ことわざ「温故知新」（古きをたずねて新しきを知る）に由来しています。

こ　国分(こくぶ)・大谷(おおや)の 歌舞伎(かぶき)は 無形文化財(むけいぶんかざい)

明治26年以来 受け継がれる素人歌舞伎

大谷芸能保存会（大谷）

※現在は大谷のみ活動中です。

大谷芸能保存会は、明治26年、今泉の市川又太郎氏を師匠として結成されました。
結成以後、会は何度か中断しましたが、昭和23年に青年団有志が集まって、再びけいこを開始しました。安達原三段目、太功記十段目などの練習を重ねた後、大谷八幡社の舞台で上演、喝さいを浴びるまでになりました。
現在も地元のお祭りや、市内外の行事に出演し、県を代表する素人歌舞伎として親しまれています。

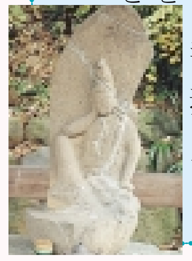
市役所・温故館で 販売中

「海老名郷土かるた」は、市役所地下売店と温故館で販売しています。1セット1,000円。問い合わせは、生涯学習課（内683）へ。

わ　若(わか)き尼(に)の 恋物語(こいものがたり) 尼(あま)の泣水(なきみず)

◆尼の泣水伝説

○「尼の泣水」は、次のような言い伝えがもとになっています。
相模国分寺が華麗に輝いていた昔、相模川で魚を捕って暮らしていた若い漁師がいた。若者は、いつしか国分尼寺の尼と知り合い、愛し合うようになった。ある日のこと、漁師が浮かぬ顔をしていたので、尼がその訳を尋ねると、漁師は「国分寺がまぶしく水面を照らすので、魚がみな逃げてしまう。あの寺さえなければ今まで通り漁ができるのに」と嘆いた。
その夜、漁師のことを思うあまり、尼が寺に火をつけた。国分寺は一夜のうちに灰になってしまった。尼はただちに捕えられ、丘の上で処刑された。その後、傍らのがけから、とどまることなく清水がしたたり落ちるようになった。人々は、尼が罪をわびて流している涙に違いないと、そのわき水を「尼の泣水」と呼ぶようになった。



尼の泣水供養碑

新春ジャンボかるた大会

青空のもと 楽しもう

「海老名郷土かるた」のジャンボ判をグラウンドに置いて取り合う「新春ジャンボかるた大会」を開催します（教育委員会・海老名市子ども会育成連絡協議会共催）。
親子でも、子ども同士でも、だれでも参加できます。21世紀の青空のもとで、元気にかるた取りを楽しみましょう。賞品をたくさん用意してお待ちしています。

有鹿小校庭で

▽日時　1月6日(土)午前10時20分～正午（受付は午前10時から）
▽会場　有鹿小学校校庭（雨天のときは、同校体育館。上ばき持参）
▽募集人数　200人（先着順）
▽申し込み　1月5日(金)までに、電話または直接生涯学習課（内684）へ。